

まちひとしごと

Vol. 12

綾ニセコスタッフ タマラ・ベリナ・フッセンさん

日本人と多くのふれあいを



サ

ンモリッツ市は、世界有数のスキーリゾートとして名高い、スイスにある小さなまち。倶知安町とは昭和39年に姉妹都市提携を結んで以来50年以上にわたって交流を続けている。

スイス人のタマラ・ベリナ・フッセンさんは、アルプスの山々に囲まれた自然豊かなその国で生まれ育った。幼いころからスキーに親しんできた彼女は、以前からスキーリゾートニセコに憧れを抱いていたという。

彼女は、1年ほど前にスイスの専門学校に入学し、その課程の中でサンモリッツ市内のホテルで働いていた。昨年9月、視察のため同市を訪れた(株)東急リゾートサービスの統括総支配人である釜江氏と出会ったことを機に来日を決意し、今冬から俱

知安町の住民となった。

「大学生のときに日本の映画を見て、日本語の発音の美しさに惹かれました。そのことをきっかけに日本語を勉強したいと思うようになったんです」

そう話す彼女は、その後の大学生活で日本について学び、卒業後には年に何度か日本を訪れ、祭りや食事などさまざまな文化に触れてきた。

現在、彼女は『綾ニセコ』のフロントスタッフとして日々多くの宿泊客を迎えている。初めはチェックインのみを担当していたが、今では客室の点検や宿泊客の旅行プランの作成などの業務も任されるようになり、仕事が充実してきたという。

「フロントの仕事は毎日同じことの繰り返しだと言われることがありますが、私はそうは思いません。お客様から毎日違う楽しい話しか聞けるからです」

たくさんの人と関わることでできるこの仕事にやりがいを感じている彼女だが、『綾ニセコ』のスタッフや宿泊客の大半は外国人で、日本語を話す機会はほとんどない。言葉は使わないと忘れてしまう、そう話す彼女は日本の文学に触れることで漢字や文法を勉強しているという。

彼女は、現在スキー場周辺のロッジに住んでいるが、春からは倶知安市街地での生活を始めるそうだ。

「引越して日本人と会う機会が

増えたら日本語がもっと上達するのではないかと思います。そして、日本人の友達がたくさんできたら嬉しいです」

思いがけない出会いから、自身のふるさととよく似た異国の地の住民となった彼女は、1年後スイスに戻り、専門学生として残された課程を修了すると晴れて卒業となるのだが、その際にはここでの経験を卒業論文のテーマに選びたいと話している。

今回、スイスに住んでいる家族や大好きな日本のアニメの話をしたくさん聞かせてくれた後、「楽しかった。ありがとう」と言ってくれた彼女。一緒に過ごしたその時間の中で、私たちは国境を越えて友達同士になった気がした。